

## 6 山陰東部における伯耆国分寺古墳の歴史的位置

高田 健一

### はじめに

近年の中国四国前方後円墳研究会の成果〔中国四国前方後円墳研究会 2018〕や、新鳥取県史編さん事業にともなう遺物の再整理によって、鳥取県域においても前期古墳の再検討が進みつつある。小稿では、様々な知見や類例を蓄積した今日的な観点から、伯耆国分寺古墳に関する諸情報のうち、埋葬施設や墳丘に関することを整理・検討し、その編年的位置や地域的特性を探っていききたい。

### (1) 伯耆国分寺古墳の埋葬施設の再検討

伯耆国分寺古墳の埋葬施設については、梅原末治による報告（以下、梅原報告）をもとに、後円（方）部中心埋葬は木棺を内包した粘土槨、第2埋葬は箱式石棺という理解が一般的と思われる。『前方後円墳集成』では、副葬鏡群の古さにも関わらず、中心埋葬が粘土槨であることを理由に、仿製鏡を含む馬ノ山4号墳とほぼ同時期と理解されてきた〔松井他 1991〕。これに対して、中心埋葬施設は通有の粘土槨と異なるので、古く位置付けるべきとの主張もなされたが〔名越 1996〕、その後も埋葬施設について新たな知見はなく、粘土槨であるとの理解が固定されたまま現在に至っている。

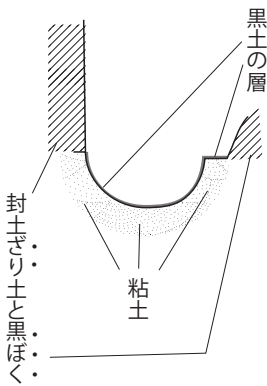
しかし、2000年代以降、鳥取県内でも古墳の埋葬施設に関する調査事例が多数蓄積され、伯耆国分寺古墳の中心埋葬施設と対比しうる類例も増えてきた。また、東洋文庫の梅原考古資料中に梅原報告に至る原因や書簡類が存在し、粘土槨との理解を再検討する余地が出てきた。

#### ① 梅原考古資料の検討

まず、梅原報告の内容を再確認しておこう。「主体部は一種の船形の粘土槨とも称す可き類」で、「長さ約二十四尺（約 7.2m：引用者補注、以下同じ）幅中央にて六尺（約 1.8m）に近く、両端に至るに従ひいわづかに縮小して、東方の端丸くここに若干の割石積みあり、西端は反対にやや角張りて恰も船の形に近き平面」形を呈する。「内部は右の外形に応じて周囲に六寸（約 18cm）内外の縁をのこし断面 U 字状に浅く掘り凹め、其の深さは中央の幅四尺五寸（約 1.4m）ある部分にて一尺五寸（約 45cm）」であったという。これに類似した埋葬施設の例として神戸市夢野丸山古墳が挙げられ、当時の梅原の認識では、この粘土層そのものが埋葬容器である可能性を考えたようだ。

続いて、現地で遺物を取り上げた倉光清六や長田長一の所見を引き、次のように記す。「（倉光は）右の粘土層の上面を通じて厚さ一分（約 1.5cm）に近き黒色層の存在を明に認め得たるを報じ…（中略）…（長田によると）この黒色層は中央部にては木材の腐朽せしものを併せて厚さ一寸（約 3cm）に上り、さらに粘土の相重なりて後者の厚さは二三寸（約 6～9cm）あり、中央落込めるの状を呈」していた。この粘土片や木材片には銅銹や朱層の付着が観察でき、木材が棺か、鏡を収めた箱か断定できないと慎重な姿勢をみせつつ、梅原は「粘土槨の内に遺骸を納むるの別個の構造」を想定している。

このようにみると、梅原の言う「粘土槨」が現代的な意味のそれとは、異なることが明らかである。現在私たちが粘土槨と呼ぶものは、埋葬容器である木棺の存在が前提であり、それを粘土で覆い包ん



第46図 倉光書簡中の図

だものを指す。棺を支える棺床粘土、棺側板の固定や棺外の副葬品配置面の役割を果たす棺側粘土、棺側を含め上面を広く覆う被覆粘土の3要素が揃ったものを典型的な粘土槨とすると、伯耆国分寺古墳において存在が明確なのは棺床粘土だけで、棺側粘土、被覆粘土ともに極めて少ないと言える。

次に、梅原の遺構認識の形成に寄与したと思われる手嶋義雄、倉光清六の書簡をみよう(第2章第8図参照)。手嶋、倉光両報告に共通するのは、横断面が丸く窪んだ棺床粘土の存在をもって「船形粘土棺」、「槽形木棺」と呼んでいる点で、必ずしも平面形を問題にしていない。手嶋が粘土の窪みそのものを棺とみているのに対し、倉光は木棺の圧痕と考えており、関係者は相互に似た言葉を使いつつ、その内実はずいぶん異なっていたよう

だ。また、倉光は、自身の手で棺内の黒色土を除去し、粘土の検出を丁寧に行なえば容易に棺の形状を明らかにできたと述べているが、このことも通有の粘土槨では考えにくい。

また、書簡中に示された棺の横断面図は、埋葬施設と墳丘盛土の関係を推測する上で興味深い。すなわち、棺床粘土の南側に水平面があり、そこから棺内にかけて「黒土の層」が描かれる(第46図)。水平面に接して黒塗りされた「封土」があり、北側の縁の直上にも「封土」が乗る様子が描かれている。この状況は、梅原報告掲載の写真からも読み取れるが(第2章第4図参照)、やはり被覆粘土の存在は不明瞭である。

このようにみえてくると、伯耆国分寺古墳の埋葬施設として現代的な意味で粘土槨の用語を使用するのはためられる。むしろ、木棺直葬と呼ぶことが妥当であろう。

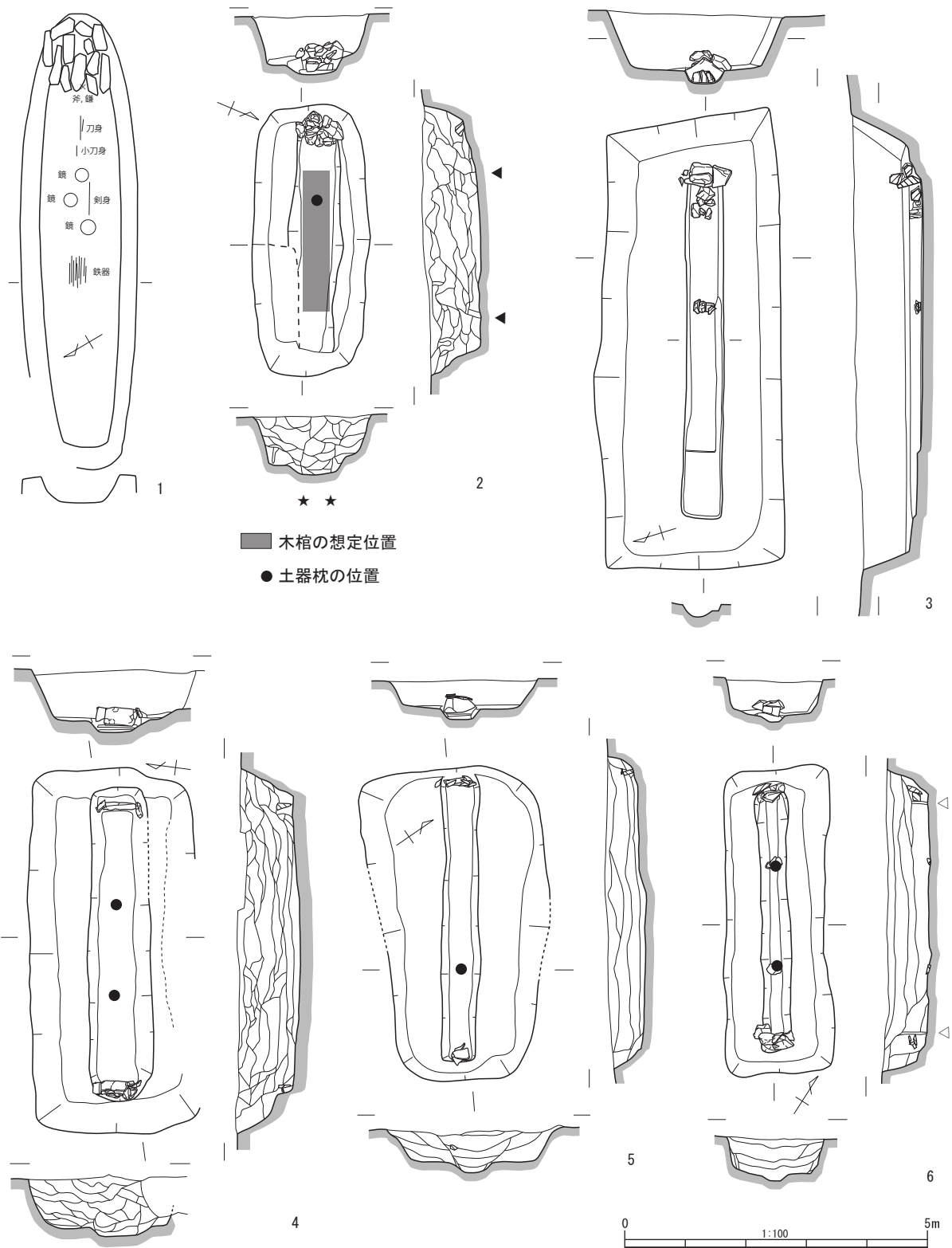
では、粘土棺床の東端にある積み石をどう理解すべきだろうか。それは「約三尺(90cm)の間に施せる特殊の加工にして、一尺(30cm)内外の割石を二三重に積み重ね」た構造物であるが、梅原報告では平面図のみで、その断面形や粘土棺床の窪みの部分との関係は明らかでない。ところが、東洋文庫の梅原考古資料には下書きとも言える図があって、縦断面が示されている(第2章第7図参照)。それによると、棺の底面より一段高くなった部分に積み石の最下段があり、これが棺外の施設と知れるのである。また、このことは、棺の東端も直線的な短辺となって、棺の平面形が長方形であることも示す。したがって、この積み石は木棺の東側小口板の裏ごめである可能性を指摘できよう。

## ② 類例の検討

伯耆国分寺古墳の埋葬施設(第47図-1)を復元する際に参考になる例として、鳥取市服部19号墳第1主体部や京丹後市カジャ古墳第3主体部がある。また、木棺の小口付近に積み石を行なう事例は、服部18号墳、倭文3号墳、篠田6号墳など鳥取平野で類例が増している。これらをやや詳しくみよう。

**服部19号墳** 径約17mの円墳であり、その墳頂中心部に1基の木棺直葬が営まれている。それは、2段墓壙で、その西側底面付近に人頭大の角礫が積み重ねられた部分がある。下段墓壙の横断面形は浅いU字形をなし、木棺の形状を反映しているかに見えるが、埋土の堆積状況を見ると単純ではない(第47図-2)。報告書でも指摘される通り、横断面で下段墓壙内に幅50cmで垂直方向に立ち上がる土層があり(図中★)、これが棺痕跡となる。一方、縦断面では、墓壙の東西壁からかなり内側に入った位置(図中▲)が木棺小口の痕跡を示す。すなわち、長さ約2.4m、幅約0.5mの箱形木棺を考えうる。

とすると、墓壙の西側にある積み石の機能が問題になる。木棺小口には接していないから、小口板



第47図 伯耆国分寺古墳の埋葬施設とその類例

の固定という実利的な機能を担っていない。また、石材は頭位と思われる西側のみである。

カジャ古墳 長径73m、短径55mの楕円形墳で、墳頂部に1基の竪穴式石槨、3基の木棺直葬が検出された。伯耆国分寺古墳と対比しうるのは、第3主体部と名付けられたものである。木棺の形状は下段墓壙の底面が湾曲を示すことから、長さ約4.5mの割竹形木棺と考えられている。木棺の東側小

口にある積み石のうち最大の板石が小口面を塞いでいたと考えられ、それ以外の角礫はその裏ごめや木棺の腐朽に伴って棺内に落下した石材と解釈されている。一方、西側小口に石材はない。棺内のほぼ中央に拳大の角礫が置かれ、その西側でガラス小玉 22 点が出土した。角礫は棺内の仕切りと解されたが、枕の可能性も考えられよう。服部 19 号墳例と同様に、頭位方向に石材があると言える (第 47 図-3)。

**服部 18 号墳** 径約 17m の円墳で、上述の 19 号墳に先行して築かれたと考えられる。第 2 主体部と名付けられた埋葬施設の方が先行する。墓壙は 2 段墓壙で、下段墓壙の東西両端には 50cm×30cm 程度の扁平な石材が立て置かれ、その周辺に角礫が配されている (第 47 図-4)。19 号墳と同様に箱形木棺と考えられ、石材はその小口板となる可能性があるが、西側小口の石材が墓壙底に接しているのに対して、東側小口の石材は一段高く削りだされた面にあり、同一水準にない。東側小口付近の土層を見ると裏ごめ土が石材を包含しているようであり、実際には木材の小口板の外側を囲うように石材が配置された可能性もある。なお、この事例では土器枕が 2 つあり、同じ棺に頭位を違えて 2 体の埋葬を考える。石材は「棺の小口」ではなく、「被葬者の頭位の側」に置かれたとの理解も可能であろう。

**倭文 3 号墳** 長辺 14m 以上、短辺 12.5m の方墳である。やはり 2 段墓壙で、下段墓壙の西側小口には板状の石材を立て置き、その上面に小型の石材を乗せる (第 47 図-5)。一方、東側小口は、板状の石材が棺内に倒れ込んだ状態であるが、墓壙底面よりも高い位置で出土しており、服部 18 号墳例と同様に、石材の基底レベルが異なっている。棺が箱形を呈するかどうか明確ではないが、下段墓壙の壁面際に木棺痕跡とも考える土層が観察されていることから、側板が立ち上がる形態を考慮して良さそうだ。なお、土器枕は棺内の中央よりやや東側に 1 点のみ出土しているが、これより 1~2m ほど西の地点でガラス小玉、折り曲げられた鉋、短刀などが出土している。鉋や折り曲げ鉄器は、頭部付近に置かれることが多いから、本例もやはり 2 体埋葬を考慮できる。

**篠田 6 号墳** 径約 14m の円墳で、第 1 主体部が木棺、第 2 主体部が箱式石棺である (第 47 図-6)。上述例と同様に、下段墓壙の東西両小口に積み石が存在するが、それらは木製の小口板の痕跡 (図中△) の外側にあり、裏ごめだったようだ。棺とみなしうる範囲は上述の事例よりも幅狭く、50cm 程度以下であり、土層断面からも箱形とは考えにくい。割竹形木棺の可能性もある。2 点の土器枕の支持台として角礫や板石が用いられており、カジヤ古墳と類似した様相をみせる。

以上のような類例の検討の結果、小口部に積み重ねられた石材は、小口板や裏ごめと解しうる場合もあるが、必ずしもその機能を果たさない場合もあることが判明した。単体埋葬の場合には頭位と考えられる方の小口にしか石材がなく、頭位を離れた 2 体埋葬の場合には両小口に石材がある点に注意すると、石材は単に機能的な意味だけではなく、象徴的な意味を帯びていた可能性を指摘できる。

福永伸哉は、木材と石材を取り混ぜて 1 つの棺を構成する事例を木石併用棺と呼び、それらが石棺墓群や木棺墓群の中で非主流派になることに注意しつつ、他集団の棺の構築材を部分的に使用することで交流関係を可視化した事例として積極的に評価した [福永 1998]。伯耆国分寺古墳の埋葬施設についても、同様な観点からその意味を考える必要がある。あたかも豎穴式石槨の一部のような外観からすると、石槨を築く集団との交流関係を表示した可能性もある。

なお、参考にした鳥取平野の諸例は、箱形木棺を主要な埋葬施設とする古墳の系列中に現れるもので、前期後半~末にかけてのものである。前期を 5 段階に区分する岩本崇 [2018] の編年案に照らせば、IV 期~V 期に位置付けられようか。伯耆国分寺古墳の築造時期も前期後半に下る可能性がある。



## (2) 伯耆国分寺古墳の墳丘の再検討

伯耆国分寺古墳の墳丘は、高さが約7mある。丘陵上の古墳が多い山陰にあって、平野に近い場所で高さ7mの墳丘構造の解明は、興味深い課題である。その具体的な解決は将来の調査に委ねるとして、現段階までに得られた情報や推測しうることをまとめておこう。

## ① 墳丘盛土と埋葬施設の位置

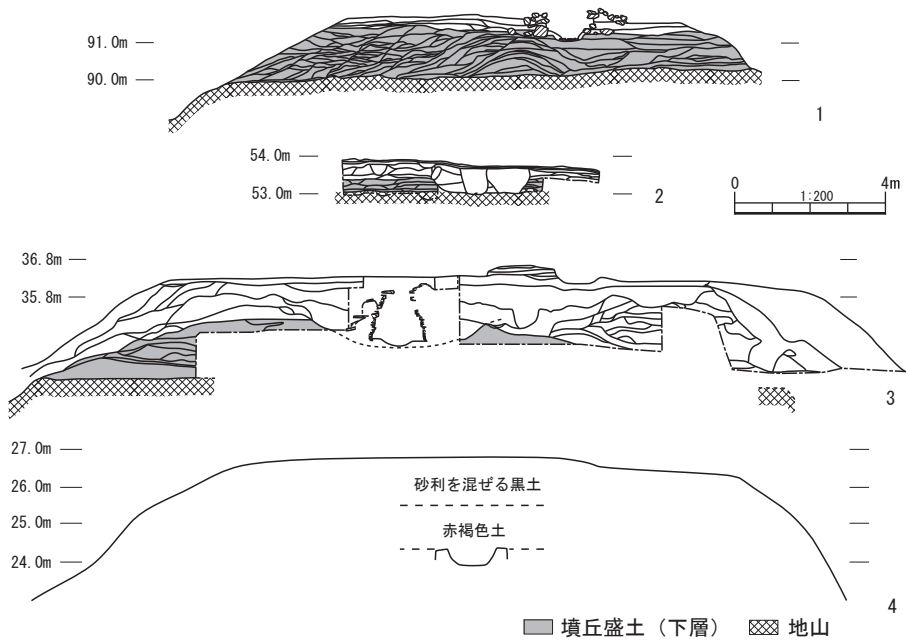
梅原報告によれば、埋葬施設は現存墳頂から約8尺(2.4m)の位置にあり、23尺(約7m)という墳丘高の約2/3の高さに営まれている。現状の墳頂部は標高27m付近にあるので、周辺の標高である20mあたりから上はすべて盛土によって構築された可能性が高いであろう。埋葬施設より上の盛土は「表面より約四尺(1.2m)の間は砂利を混ぜる黒土にして、以下赤褐色土を以ってし、其の断面を現わせる部分に明に築成の層序を示す」という。また、残存する墳丘裾が削平された際の観察所見が文化財巡視の過程で報告されており、「最下層に、黒ぼくまじりの土で、まず古墳の外形を地どりし、その上に、人頭大の粘土塊を丁ねいにならべて積み上げ、平地に築造された過程」が見られた〔伊佐田1990〕。最下層に整地層のようなものがあり、単位が明瞭な盛土が施されるという知見は重要である。

山陰地方において、墳丘盛土の構築方法が詳しく調査された古墳は多くない。事例が豊富なのは丘陵上に連続して築造された方墳や円墳であるが、それらの成形は地山削り出しが多く、盛土をほとんどたないか、部分的である。そのような墳丘構築技法の起源は弥生時代の墳丘墓に求めうる。一方、前方部をもつ古墳の場合は、比較的厚い盛土をもつ場合が多く、地山水平面を削り出したのちに墳丘を構築している(第11表)。さらに、そのような古墳の埋葬施設は掘込墓壇ではなく、無墓壇の場合が多い。すなわち、埋葬行為に伴う葬送儀礼が墳丘構築後に行なわれる墳丘先行型ではなく、墳丘構築と同時に進行する墳丘並行型である点が重要である〔岩本2010〕。これは、畿内で主流となる古墳の構築技法とは系譜を異にするというだけでなく、そもそも在地に系譜が辿れない新出の要素であり、前方部が付属する墳丘形態と密接に関連しつつ山陰に波及した技術の可能性を考えうる。

伯耆国分寺古墳の墓壇形態を知る手がかりはないに等しいが、埋葬施設上の土層が明確に上下に大別可能という点は、それが墓壇埋土であるよりは、墳丘盛土である方に可能性を感じさせる。というのは、厚い墳丘盛土をもつ事例では、埋葬施設構築の前後で盛土の方法が切り替わることが観察され

第11表 墳丘盛土と埋葬施設構築方法の関係

| 古墳名   | 墳形 | 墳丘盛土           | 墓壇        | 埋葬施設       | 備考          |
|-------|----|----------------|-----------|------------|-------------|
| 神原神社  | 方  | 2.6m+          | 掘込 b+ 無   | 竪穴式石槨 + 木棺 | 地山水平面削出     |
| 晩田山3号 | 方円 | 2.2m           | 無         | 竪穴式石槨 + 木棺 | 地山水平面削出     |
| 普段寺1号 | 方方 | 0.8 (~ 1.5) m+ | 無         | 木棺直葬か      | 地山水平面削出     |
| 松本1号  | 方方 | 1.2m+          | 掘込 a ?    | 粘土槨 + 箱形木棺 | 地山水平面削出     |
| 美和32号 | 方  | 1.2m           | 掘込 b      | 箱形木棺直葬     | 旧表土上に盛土     |
| 桂見2号  | 方  | 1.0m           | 掘込 a      | 箱形木棺直葬     |             |
| 社日1号  | 方  | 0.3m           | 掘込 a (地山) | 木槨 + 箱形木棺  |             |
| 大成    | 方  | 0.1m           | 掘込 a (地山) | 竪穴式石槨 + 木棺 |             |
| 塩津山1号 | 方  | なし             | 掘込 a (地山) | 竪穴式石槨 + 木棺 |             |
| 造山3号  | 方  | なし             | 掘込 a (地山) | 竪穴式石槨 + 木棺 |             |
| 日原6号  | 方  | なし             | 掘込 a (地山) | 船形? 木棺直葬   |             |
| 本高14号 | 方円 | なし             | 掘込 a (地山) | 不明 (未調査)   | 第2埋葬は0.4m盛土 |



第48図 墳丘盛土と埋葬施設の位罫

1. 晩田山3号墳 2. 普段寺1号墳 3. 神原神社古墳 4. 伯耆国分寺古墳 (模式図)

ており (第48図)、上層と下層に大きく2大別可能だからである。

### ② 墳丘形態

墳丘形態は、梅原報告によってすでに前方後円墳の可能性が示唆されているが、前方部がつく形態となる可能性は、墳丘盛土構築方法の点からも示唆される。一方、新編倉吉市史編纂事業による残存墳丘の再測量によって、

前方後方墳の可能性が示された〔名越前掲〕。山陰東部地域における前期古墳の一般的な傾向として、方形を基調とする墳丘形態から円形原理を取り入れた墳丘形態への転換が認められるから、それは十分にありうるが、前方後円墳の可能性を否定できるわけではない。

埋葬施設の類例として取り上げた服部古墳群では、17号～19号墳が連続的に築造されているが、最も先行する17号墳は方墳で、18号墳以降に円墳となる。篠田古墳群の場合も、方墳の10号墳などが先行し、6号墳は調査された中で最新相と考えられている。倭文3号墳の場合は方墳であるが、鳥取市里仁古墳群のように、中期前葉でも方墳が築かれる場合があることを考慮すると、方墳から円墳への転換がどこでも同時に進行したわけではないと言える。伯耆国分寺古墳は、円形原理の古墳が出現し始める時期に相当しており、前方後円墳であっても何らおかしくない。

## (3) 伯耆国分寺古墳の編年的位罫と地域的性格

### ① 編年的位罫

すでに先行して述べたが、伯耆国分寺古墳の築造時期は、前期後半と考えられ、5期区分のⅣ期に位置付けられる可能性が高いと判断する。農工具の多量副葬や短刀の存在から、副葬品の観点からみても紫金山古墳などと同じ段階のⅣ期と考えうるが、ここでは、埋葬施設の類例との接点を重視しよう。服部18号墳、19号墳に使用された土器枕 (鼓形器台) は、脚部が短縮したものや口縁端部に凹線を施すなど伝統的な規範をやや逸脱したものを含んでいることから、小谷3式新段階 (Ⅳ期) に位置付けられよう〔岩本2017、松山2018a〕。また、倭文3号墳の副葬鉄器は、少量ながらも構成は伯耆国分寺古墳と類似しており、時期比定の参考にできる。残念ながら土器枕の鼓形器台は詳細不明であるが、松山智弘は2号墳とともにⅣ期に位置付けていることが参考になる〔松山2018b〕。

伯耆国分寺古墳と同じ旧社村地域に位置し、連続した首長系譜と考えられている大谷大将塚古墳、上神大将塚古墳との関係はどうであろうか。大谷大将塚古墳は、これまでに出土遺物が知られていないが、伯耆国分寺古墳とほぼ同規模 (30間：約54m) の前方後円墳で、後円部の中央に主軸と直交し

て板石を組み合わせた箱式石棺を取めるという〔梅原報告：67〕。このような箱式石棺の出現は前期後半以降に位置付けられようが、少なくとも、伯耆国分寺古墳よりも先行するとは考えにくい。

一方、上神大将塚古墳は径22mの円墳で、1916（大正5）年に箱式石棺から多数の副葬品が掘り出されたが、回収されて基本的な内容が判明する貴重な事例である。仿製三角縁神獸鏡や鋏形石の存在から前期に位置付けられることが多いが、武器に鉄矛を複数含むこと、鉄刀の茎末端が隅抉尻となること、また、鉄鏃とされた鉄器は三尾鉄の可能性が高く、有機質製の衝角付冑の存在を窺わせることなどから中期前葉に下る<sup>(1)</sup>。したがって、ここでは、伯耆国分寺古墳（Ⅳ期）、大谷大将塚古墳（Ⅴ期）、上神大将塚古墳（Ⅵ期）という変遷を考えておきたい。

## ② 地域的性格

注意すべきは、この3基はいずれも葺石や埴輪といった墳丘の外表施設をもたず、埋葬施設は東西頭位（伯耆国分寺古墳と大谷大将塚古墳は主軸直交配置）で、竪穴式石槨を採用しないという点で共通することである。山陰地方において、葺石や埴輪をもたない古墳は珍しくないが、後述する馬ノ山古墳群など近隣の他の古墳群との対比においてみると、三角縁神獸鏡や鋏形石など畿内の王権との繋がりを象徴する副葬品を継続的に保有しつつも、墳丘や埋葬施設においては在地的、非主流的な性格を保持する点にこの系列の個性を見いだすことが可能である。

このような旧社村の古墳群に対して、同時代に並行して存在する向山古墳群宮ノ峰支群、馬ノ山古墳群はやや異なる性格を持っていたと考える。

向山古墳群宮ノ峰支群は、倉吉市小田の丘陵上に位置し、1989～90年にかけて尾根上が広く調査された〔真田1990、根鈴1991、名越前掲〕。28×24mの方墳（19号墳）、径30mの円墳（21号墳）、径24mの円墳（23号墳）の3基が前期のうちに連続的に築造された高塚古墳である。このうち、19号、21号墳は主要埋葬施設に竪穴式石槨を採用し、19号墳のそれは大規模に破壊されて詳細不明だが、21号墳は内法長4.7m、幅0.9m、割竹形木棺を内包すると推測された。これらの時期は不明瞭ながら、前期後半に置けるようであり、墳丘規模は伯耆国分寺古墳を含む旧社村の古墳群の後円（方）部に匹敵する。つまり、墳丘形態や副葬品では旧社村の系列に劣るものの、同じ旧久米郡内に竪穴式石槨という新来の埋葬施設を導入する有力な古墳系列が並行して存在することを示す。

一方、伯耆国分寺古墳と常に比較される存在の馬ノ山4号墳（前方後円墳、全長約100m）は、かつては古く位置付けられていたが、仿製鏡研究の進展〔下垣2011〕とともに年代を下げて理解されるようになった。近年では、墳丘上で表採された埴輪の中に鱗付円筒埴輪が存在することなどからも、前期末（Ⅴ期）に下ることが明らかである。その一方、従来は馬ノ山4号墳に後続するとされた宮内狐塚古墳（前方後円墳、全長約95m）は、埴輪や墳丘出土土器の点では1段階古く位置付けられることが判明した〔東方他2017〕。また、前方後方墳と考えられてきた全長約70mの馬ノ山2号墳は、近年の測量調査の結果前方後円墳と考えられるが、馬ノ山丘陵の尾根先端部に近い立地のために4号墳に先行すると考えられている。馬ノ山4号墳に先行して少なくとも2基の大型前方後円墳が存在するのである。旧河村郡・東郷池周辺的大型前方後円墳は、いずれも葺石や円筒埴輪を具備しており、旧久米郡の古墳系列とは外表施設の点でも大きく異なる性格を有する。埋葬施設が判明しているのは馬ノ山4号墳のみであるが、宮内狐塚古墳も竪穴式石槨と考えられており〔鳥取県埋蔵文化財センター1986〕、内部構造の面からも畿内の王権とのより強い結びつきが窺われる。

おわりに

伯耆国分寺古墳の埋葬施設と墳丘に対して、様々な推測も交えつつ再検討を行なった。その結果、埋葬施設は木棺直葬と考えること、前期後半(Ⅳ期)に位置付けうること、副葬品の点では畿内中樞との密接な交流関係をもちつつも、埋葬施設・墳丘構築など葬送儀礼・古墳祭祀に関わる部分では、むしろ畿内中樞とは異なる要素をもつ点を指摘した。伯耆国分寺古墳を築造した人々は、様々な点で畿内中樞の影響が色濃く、優勢さを保持する馬ノ山(東郷池周辺)古墳群や、埋葬施設には主流派の方法を導入する宮ノ峰支群を残した人々とは異なる立ち位置を選択していた可能性を考える。

論じ残したことは多いが、さらなる検討は別稿で果たしていきたい。

## 註

- (1) 上神大將塚古墳の出土品は、東京国立博物館において実見した。観察所見等の詳細は、2019年度に刊行予定の『新鳥取県史』資料編考古3・古墳時代で報告する。資料調査にあたっては、古谷毅、河野一隆、河野正訓、山本亮の各氏のお世話になった。感謝申し上げます。

## 引用文献

- 伊佐田靖之 1990「文化財の風化を憂う」『文化財だより』第21号 倉吉文化財協会 pp.1-2
- 岩本 崇 2010「古墳時代前期における地域間関係の展開とその特質」『龍子三ツ塚古墳群の研究』大手前大学史学研究所・龍子三ツ塚古墳調査団 pp.403-436
- 岩本 崇 2017「西晋鏡と古墳時代前期の暦年代—鳥根県古城山古墳の鏡と土器をめぐって—」『鳥根考古学会誌』第34集 鳥根考古学会 pp.63-78
- 岩本 崇 2018「副葬品と埴輪による前期古墳広域編年」『前期古墳編年を再考する』六一書房 pp.137-148
- 眞田広幸 1990「前期方墳群の調査—倉吉市向山古墳群宮ノ峰支群」『季刊考古学』第31号 雄山閣 pp.83-84
- 下垣仁志 2011『古墳時代の王権構造』吉川弘文館
- 鳥取県埋蔵文化財センター(編) 1986『鳥取県の古墳』鳥取県教育文化財団
- 中国四国前方後円墳研究会(編) 2018『前期古墳編年を再考する』六一書房
- 名越 勉 1996「前方後円墳の時代」『新編倉吉市史』第1巻古代編 倉吉市 pp.161-186
- 根鈴智津子 1991「向山古墳群宮ノ峰支群の発掘から」『文化財だより』第22号 倉吉文化財協会 pp.4-6
- 東方仁史・君嶋俊行・岩垣 命・中原 斉 2017「東郷池周辺大型前方後円墳の埴輪」『調査研究紀要』8 鳥取県埋蔵文化財センター pp.71-86
- 福永伸哉 1998「埋葬施設構築材の象徴性」『古代中世の社会と国家』清文堂 pp.3-19
- 松井 潔・下高瑞哉 1991「伯耆」『前方後円墳集成』中国・四国編 山川出版社 pp.39-45
- 松山智弘 2018a「山陰」『前期古墳編年を再考する』六一書房 pp.161-174
- 松山智弘 2018b「山陰」『前期古墳編年を再考する』六一書房 pp.311-322
- ※ 紙幅の都合により、発掘調査報告書は割愛せざるを得なかった。ご寛恕いただきたい。また、2018年11月17日に開催されたシンポジウム『伯耆国分寺古墳とその時代』(於:倉吉交流プラザ)では、小稿で述べたこと以外の話題にも触れたが、それを詳述するに至らなかった。触れ得なかった点については、他日を期したい。

## 挿図出典

- 第46図:梅原考古資料(公益財団法人東洋文庫所蔵)中の倉光清六の書簡より模式図作成。
- 第47図:各報告書より一部改変して再トレース。
- 第48図:各報告書より一部改変して再トレース。伯耆国分寺古墳については、新編倉吉市史掲載の墳丘測量図から断面図を作成し、梅原報告の記述にしたがって埋葬施設の位置等を中央に書き込んだ。